

『華夷訳語(甲種)』漢字音訳の基礎方言

中村雅之

1. はじめに

つい最近、更科慎一氏によって『華夷訳語(甲種)』の基礎方言についての検討がなされた¹⁾。そこでは、-m韻尾を保存することや、宕・梗・曾摂入声字に二重母音が現れることから、「これを要するに、甲種本『華夷訳語』の音訳漢字の基礎方言は、『中原音韻』と幾つかの差異を有しつつ、依然として南京官話の影響を受ける以前の、明代初期の北方官話の特徴を濃厚に残した変種であると言い得る。」とまとめられている。

本稿ではこの問題を再検討し、基礎方言については更科論文と異なり、南京方言であるという結論を確認しようとするものである。

2. -m韻尾の保存

更科論文では、-m韻尾の保存が『華夷訳語(甲種)』音訳漢字と中原音韻との共通する特徴とされている。しかし、明初において-m韻尾を失った有力方言のあることはおそらく知られていないので、方法論上、-m韻尾の保存を基礎方言の認定に利用することはできない。例えば明初の南京において-m韻尾が消失していたというような事実があるならば、-m韻尾の有無が重要になるが、そのような事実は確認されていない。

3. 宕・梗・曾摂入声字の音形

更科論文によれば、入声字で二重母音を表している例は以下の通り。

匀温：(文語) jegün (293.針、1:10b4)

伯顔：(文語) bayan (557.富、1:19a6)

可児伯：(文語) kör-bei (74.凍、1:03b2) など動詞完了終止形語尾 bai/bei 全7例。

黯巴兒伯：(文語) yambar bai (843.不揀甚麼、1:28b3)

⑤阿児拍：(文語) arbai (103.大麦、1:04b2)

⑥孛魯兀澤：(文語) bolu-’ujai (做恐、3:17a5)

⑦^ㄊ完澤：(文語) öljei (福、2:01a5)

⑧克：(文語) kei (5.風、1:01a5)

⑨捏克-迭^ㄊ延：(文語) nekei debel (326.皮襖、1:11b6)

以上が全てである。つまり、文字としてはわずかに「匀・伯・拍・澤・克」の5文字の

1) 更科慎一(2007)「甲種本『華夷訳語』音訳漢字の基礎方言の問題」『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』東京:好文出版。

みであり²⁾、異なり語数は9例程度にとどまる。豊富に用いられている入声字全体から見れば、上に挙げたような二重母音の表記としての使用は例外的と見なしうる。そのような例外をもって、基礎方言の性格を論じるのはかなり危険な方法と言わざるを得ない。『華夷訳語（甲種）』の音訳においては、入声字のほとんどは「勺（jo～jō）」「約（yo）」「格（ge）」「客（ke）」のように、二重母音を表しておらず、『中原音韻』に見られるような北方音的な音形とはかなり異なる。

4. /ge/・/ke/・/gö/・/kö/の音訳

更科氏は触れていないが、『華夷訳語（甲種）』の基礎方言を論じる際に最も考慮すべきは、元代の音訳と明初の音訳とでモンゴル語/ge/・/ke/・/gö/・/kö/の表し方が全く異なるという事実である。これについてはすでに『KOTONOHA』誌上でも論じられたことがあるので³⁾、要点のみを以下に述べることにする。

果撰一等の「哥」「可」などは、『至元訳語』など元代の音訳ではモンゴル語/ge/・/ke/に充てられているが、明初の『華夷訳語（甲種）』では/gö/・/kö/に充てられる。これは両者の漢字音訳における基礎方言が異なることを意味する。他の資料との比較から、果撰一等開口の韻母は北京など北方では非円唇母音 [ɣ] であり、南京では円唇母音 [o] であったと考えられるから、元代の音訳は主として北京（＝大都）音に基づき、明初の音訳は南京音に基づいたと考えられる。

5. 例外の生じる理由

問題となるのは、3節で見た例外的な音訳であるが、これについては元代の音訳法の名残（あるいは踏襲）であると解釈できる。

モンゴル語の「風」を表す「克」（kei）はすでに『至元訳語』にあり、元代の（つまり北方音に基づく）音訳である。『華夷訳語（甲種）』はそれを踏襲したわけであるが、おそらく当時の南京音の体系の中にはモンゴル語/kei/に充てられる音節がなかったのであろう。「伯顔」は「富」を意味する一般名詞としてよりも、それに由来する人名として元代に一般的な音訳であった。/bayan/=「伯顔」という図式が一般化していたが故に、『華夷訳語（甲種）』においてもそのまま用いられたのである。またそこから「伯」=/bai/という音訳法が生まれるのも自然なことであったと思われる。「完澤」は元代の表記「完澤」に「丁」を付して若干の修正を加えつつ利用したものである。この語は本体の「完澤」よ

2)このうち「拍」は「伯」の誤りである可能性がある。その場合、異なり字数は4文字ということになる。また「勺」は通常は/jo/～/jō/を表しており、上の例は全くの例外的な用法である。

3)吉池孝一(2005)「哥葛などの元代音について」『KOTONOHA』36。中村雅之(2006)「近世音資料における果撰一等の表記」『KOTONOHA』39。

りも、それに由来する皇帝名「完澤篤」(öljeitü「福をもちたる(者)」の意)によって固定された音訳となり、『華夷訳語(甲種)』に踏襲されたものであろう。

6. 『華夷訳語(甲種)』音訳の基礎方言

以上をまとめれば、『華夷訳語(甲種)』の漢字音訳については、その基礎方言は南京方言と考えるのが穏当であり、北方音風に見える表記は元代以来の表記を踏襲した結果であると見なしうる。

およそ音韻資料には、伝統的な側面と革新的な側面があるが、『華夷訳語(甲種)』の音訳においては、4節に述べたように果摂一等の用法において革新性が顕著であり、北京音から南京音への切り替えが遂行されたと判断するに十分である。一方、3節に挙げたような北方音的な性格をもった音訳は全体の中ではごく例外的なもので、しかもそれらは個別の事情により元代の音訳を踏襲したものと考えられる。したがって、『華夷訳語(甲種)』漢字音訳の基礎方言を問題にする際には、3節に示したような例を主たる根拠とするわけにはいかないのである。

近世音の発達は、北京音と南京音の対立と相互干渉という面から究明されるべきであると考えが、北京音にせよ南京音にせよ、明初の資料は非常に少ない。そのため、『華夷訳語(甲種)』の漢字音訳の基礎方言問題は、単にその資料のみの問題にとどまらず、近世音全体の究明にも大いに関わる。

なお、本稿では更科論文に合わせて『華夷訳語(甲種)』のみを問題としたが、『元朝秘史』の音訳についても、基礎方言は『華夷訳語(甲種)』と同様であると見なしてよい。この二つの資料は細部の音訳法においていくつかの違いを見せるが、基礎方言に関わるような差異は認められない。